

4/15 曹月

# 認知症サポーター1000万人超

14年目

理解広がる

認知症を正しく理解し、本人や家族の支えになる「認知症サポーター」が全国で1千万人を超えた。身近な病という認識の広がりから詳しく知りたい市民が増えるとともに、できる範囲で手助けする手軽さも人数増につながった。

## ▼3面=町民8割受講

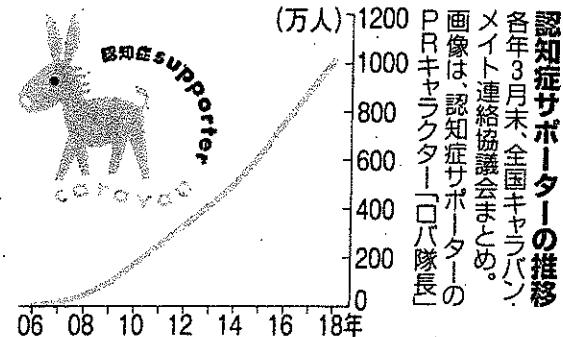
サポーター制度の事務局を担う全国キャラバン・メイト連絡協議会（東京都新宿区）が今月、公表した。

サポーター制度は厚生労働省が2005年に始めた。認知症は当時、原因がわからず治らないと偏見の目で見られており、正しく知って不安を除く狙いで導入された。サポーターになるには約90分の無料

講座を受ける。認知症の原因や症状について説明を受け、「驚かせない、急がせない、自尊心を傷つけない」といった心得や、「後ろから声をかけず、目線を合わせる」など会話のコツを学ぶ。年齢制限はない。サポーターの目印の腕輪「オレンジリング」を修了時に受け取る。

協議会によると、サポーターの数は想定を上回るペースで伸びてきた。開始5年目で100万人を超え、その後も毎年約100万人前後増加。今年3月末で1015万1589人に達した。最近は小中学校単位で受講することも多く、20歳未満のサポーターは210万人にのぼる。

（北村有樹子）



北海道医療大の向谷地生良教授（ソーシャルワーク論）の話 認知症が身近な問題になる一方で、地域のつながりが希薄になった社会に危機感を持つ人が増え、支え合いの必要性を感じた人がなつていった一面がある。近くにいる弱い立場の人たちを助ける「心のサポーター」のような存在に発展していくことが望まれる。そのためには人間の尊厳について詳しく学べる機会があるといい。